スポーツＪ「時の人」は、サンフランシスコ・ベイエリアを中心に活躍する方々を紹介するコーナーです。文化的、社会的に貢献されている人々に、さまざまな角度から焦点をあてご紹介いたします。

# 時の人

# IntroMed, Inc. IFC

## 川田 ゆかり 社長

「私達ＩＦＣのゴールは、自分の国で自分の病気を治すことが出来ないような、医療のひずみを埋めることです。」そう語る川田さんの声には、自らも苦境を乗り越え前進する意志の強さと、患者一人一人の辛さを共感しようとする穏やかさが感じられる。

### ＩＦＣの誕生

アメリカ文学の教授を父親に、英語塾経営者を母親に持つゆかりさんは、アメリカのような英語圏で学ぶことを、幼い頃から自然の流れのように感じていたという。16歳の時、高校留学のため単身渡米、その後ユニバーシティ・オブ・コロラド（コロラド大学）へ進み、経営学、コンピューター情報処理、マーケティングを学んだ後、ＭＢＡを取得。卒業後はその専門分野を生かし、米国ジョンソンアンドジョンソン社マーケティング部に入社、レーザーメスの開発とマーケティングに携わった。レーザーメスは当時から脳外科を始め、耳鼻咽喉科等さまざまな分野で使用されていたが、やはり興味を引かれたのは、最も自分にとって身近な婦人科系疾患の処置に関してであった。手術に立ち会い、また、当時進行中であった日本からの技術提供による共同プロジェクトに関りながら、専門知識を吸収した。

「ＭＢＡ以上に、ビジネスの全てを学んだ」と、今日も尊敬して止まない女性上司との出会いを経て、１９９５年生殖医療を専門とするＩＦＣ（インターナショナル・ファーティリティー・センター）を設立、２０００年にはイントロメッドＩｎｃ．を創設した。

「何か大きなものに押されるようにスタートしました。最初は全て楽しい経験でした。」

たった一人、自宅のガレージで始めた当時を振り返り、「本当の意味での大変さを痛感したのは、最初の楽しい時期が過ぎてからですね。患者様を番号でこなしていける仕事ではなく、一人一人の苦しみや悩みをすべて受け止めていかなくてはならないですから」と、言葉を添える。

夫婦間でも話し合うことが難しいほどの非常に繊細なテーマを扱うため、些細な会話から、プライバシーの厳守にいたるまで細心の注意を払う必要がある。

「患者の皆様は、言葉から考え方まで一人一人異なりますので、その対応はコンピューター化やマニュアル化できません。また、非常に繊細な個人情報を取り扱いますので正確さに加えてプライバシーの厳守はなによりも重要です。」

設立以来、仕事のない日は一日としてなく、睡眠時間は平均４時間程。常に携帯電話とＥメールで患者と連絡を取り続け、代理母がマタニティーブルーになったといえば、病院にケーキを持って訪れ、容態が急変したといえば手術室に駆けつけるという。

### それぞれのハッピーエンド

米国では15年程前から治療法の一つとして取り入れられている卵子提供プログラムや代理出産プログラムだが、日本では社会背景、医療体制の面から未だ現実的な治療法として扱われておらず、同社のような医療コーディネーターの仕事も正しく理解されていない場合がある。

「初めて日本でお会いする患者様は皆、非常に緊張しておられます。また、それまでご夫婦が抱えてきた悩み、蓄積されてきた辛さ、やり場のない怒りといったものを受け止めていくのが最初の仕事です。プログラムによって多少の差はありますが、初回検診の準備開始から妊娠の判定結果が出るまでにかかる時間は約半年です。患者様にとっては、それ以上に自分の卵子での妊娠治療をどこで打ち切るか、自分の遺伝子を持たない子供を持つ決断にいたるまでの期間が非常に辛く長い道のりですね。一つのテストで答えが出るというわけではなく、技術がこれほど進んでいても妊娠の可能性自体はブラックボックスの状態であり、全ての面から考えてグレーな部分を残したまま、決断しなければなりませんから。」

とそのプログラムを選択する患者一人一人の苦悩を説明する。なかには問い合わせから6、7年たっても決断に踏み切れない場合もあるという。

「終わりのないトンネル」と称されることの多い不妊治療を受ける患者を、様々な方面から支えながら、

「一緒にがんばっていきましょうと励ましながら進むものの、その道のりはつらいことの方が圧倒的に多いのです。金銭的、時間的、身体的、精神的な負担を負いながら２人の重要な目的のために信用を得てこちらに来ていただくのですが、医療である限り絶対の成功の保証がないのです。」

と、患者の苦しみ、辛さを真摯に受け止める。

また非常にまれなケースだが、渡米後、検査・診断を受け、自分の卵子では妊娠の可能性がないと知り、その明確な診断結果を手にしたことで選択肢が生まれることもあると川田さんは語る。

「子供を持つことだけが選択肢でなく、子供を持たずに二人で楽しく生きていくという選択をする方もあります。自分たちの求めているものが何だったのかをお考えになり、ご夫婦それぞれのハッピーエンドをお選びいただける一つまり、『選ばない選択』にもつながるのです。」

全てを受け止め、最先端の技術と人的側面を共にサポートしてきた川田さんにとっての喜びはやはり、それぞれのご夫婦の幸せな姿を見ることに尽きる。

「治療の支援をした方から何年も経って、お子様の写真を頂いたり、こちらを訪ねてくれることがあると、本当にうれしいです。心からよかったと思う瞬間です。」

### ちょっと目がわるいんです

約20年もの間、網膜色素変性症という難病指定の遺伝子疾患と向き合いながら

「特に重荷に思ってはいません。周囲の者が、腫れ物に触るような感じではなく、『普通の人なのだがチョット目が悪い』という扱いをしてくれますので気が楽です。」と、常に自然体で受け止める。

「自分の病気は今の医療技術では治せない。それなら、自分の目が見えるうちに治療の可能性のある病気を治す力になりたいと思っています。」

小心にして大胆ー幼い頃、叔母からこう称されたという川田さんは、常に前を見続ける。

今後の自分自身、またＩＦＣの抱負を、

「最終のゴールは医療のひずみを埋めること。それは、現在のように、何かの要因で自分の病気が自分の国で治せないような状態をなくすことー皮肉なことですが、ＩＦＣのような医療コーディネーターの必要をなくすことですね。」

そう語りながら澄んだ笑みを浮かべる。

高校時代の同級生であったご主人と共に、さらにリサーチを重ね、より幅広い分野での医療のひずみを埋めていきたいと語る川田ゆかりさん。日米間に止まらず、より一層広い範囲での医療制度の溝が縮まり「終わりのないトンネル」に一筋の光がさす瞬間もそう遠くはないかもしれない。

**PROFILE　YUKARI KAWADA**

１９７６年　留学生として１６歳で単身渡米
１９８４年　University of Colorado にてＭＢＡ取得
　　Johnson & Johnson 社入社
１９９５年　ＩＦＣの活動開始
２０００年　IntroMed, Inc. 社設立
２００１年　ＩＦＣ東京オフィス設置
２００２年～２００５年　日本の生殖医療関連の学会や医大等において講演活動

（写真右）：（左から）カール・ハーバート院長と川田ゆかりさん。カール・ハーバート院長はサンフランシスコ・ベイエリアの生殖医療・不妊治療専門医の中で一番長いキャリアを持つ医師。米国で体外受精プログラムを最初に立ち上げた大学病院のうちの一つ、ヴァンダービルト大学病院で専門医としてスタートした後、２０年以上もの間、不妊治療の最先端の現場で活躍している。

（写真左）：ＩＦＣと提携している「パシフィック生殖医療センター」のあるサンフランシスコ市内のビル。同センターには排卵誘発を用いての人工授精、通常の体外受精、ドナー卵子による体外受精、代理出産等のプログラムがあり、生殖内分泌学および不妊治療の認定医からなる医療チームが治療にあたっている。

＊使用している記事などに問題がある場合はIFC宛て御連絡ください。